

NEWSLETTER

James Joyce Society of Japan, April 2020



Topics

1. 第32回研究大会のご案内
2. 研究発表要旨
3. シンポジウム要旨
4. 第32回研究大会日程・大会会場
5. 新常任委員候補と会長の退任および
新会長
6. 会員専用メーリングリストについて
7. 会費のお振込みについて

事務局連絡先

〒448-8542

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 外国語教育講座

道木一弘研究室内

✉ joyceanjan@gmail.com

🔗 協会ホームページURL:

<https://www.joyce-society-japan.com>



グラットン橋からリフィ川を望む (山田幸代/撮影)

1. 第32回研究大会のご案内

2020年6月6日（土）、第32回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が東京・大妻女子大学千代田キャンパスにて開催される予定です。ただし、新型コロナウイルスの感染拡大が終息しない場合、状況によっては大会の中止も考えざるを得ません。最終的な判断は5月の連休明けを待ってまずは協会のホームページ上でお伝えし、追って葉書等でお知らせするつもりであります。また、このような現状を踏まえ、懇親会については、今回は開催しないことに致します。

以上、ご不便お掛け致しますが、ご理解の程何卒宜しく申し上げます。

2. 研究発表要旨

研究発表 (1) 南谷奉良

ジョイスと鞭打つ者 (flogger, lasher, whipper) —“An Encounter”と“Counterparts”における痛みの詩学

“Ireland, Island of Saints and Sages” (1907)で言及されている、刑罰法に違反したアイルランド人の農夫が服を剥がれて馬車に縛りつけられ、腸が道端に溢れでるほどの打擲を腹部に受けたというエピソードに、ジョイスという作家に固有の感情が含まれていることは間違いない。実に彼の著作には鞭打ちの行為とその痛みの経験が数多く書き込まれている。短篇“An Encounter”では、Mahonyによる鳥や猫などの小動物や貧しい子供たちをいじめる行為やLeo Dillonが学校で受けるだろう懲罰が、原っぱにあらわれる謎の老人が愉悦をこめて語る鞭打ちにおいて嗜虐的サディズムとして円環する。短編“Counterparts”でも、不当な力の行使が円環し、Farringtonの息子Tomが常習的な虐待としての杖による打擲を与えられている。未完の長編*Stephen Hero*では、杖で少年たちを威嚇する物乞いの老人の声と悪意のある顔が、主人公の青年に幼少期の叱責体験と寄宿学校の“pandied boys”たちを回想させている。この体験は言うまでもなく、完成した自伝的長編*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916)で、感覚と言語を相補的に習得していく主人公の少年を通じて詳細に描出されることになる。*Ulysses*(1922)ではcarriagewhipやpandybat、cat-o'-nine-tailsなどの具体的な道具とともに、サーカスで使役される少女や街なかで酷使される荷役動物にふるわれる鞭打ち、英国海軍やコンゴ自由国での笞刑といった現実的な社会問題が言及されるに加え、性的快楽を伴うマゾヒスティックな鞭打ちの行為も登場する。いくらか瞥見するだけでも明らかだが、ジョイスの著作にはflogger, lasher, whipperといった「鞭を打つ」アクターが常に存在し、そのアクターとともに痛みの鈍化・無化、痛みの言語化、痛みの分有という主題が書き込まれている。

本発表は「ジョイスと痛み」という大きな研究主題の一角を成す。発表では、Katherine Mullin (2003)がすでに着手しているような、19世紀から20世紀初頭にかけての学校や家庭、規律的な現場で行われていた体罰や躰としての鞭打ちの文化史的考察、また (ジョイスの痛みの言語化を評価している) David Biro (2010)の著作のように、主観性や情動に重きを置きながら痛みを捉え、かつその痛みを表現する修辞を研究するアプローチを援用する。そして他者に苦痛を与える構造を再生産するという点で*Dubliners* (1914)において一つの対応的ペアである“An Encounter”と“Counterparts”の2つの短編を扱い、鞭打つ者たちが与える痛みの詩学を考察する。(与える/受ける) 痛みが登場人物の行動や判断、思想にどのように影響し、物語のプロットをどのように展開させているかを論じることは、鍵語としてはもはや批評的効力を失ったかに見える伝統的な《麻痺》(paralysis)の概念を、「痛みの鈍化・無化」として別の力学のなかで再考することにも繋がるだろう。また、前期作品から後期作品にかけてのジョイスの痛みの描き方が段階的に変化していくフェーズの解明へと通じていくと考えている。

研究発表 (2) 東郷登志子

第12挿話「キュクロプス」のパロディ——R.エメット処刑に隠された神話的コード——

『ユリシーズ』と『オディッセイア』との平行構造はジョイス自らが表明し、スチュアート・ギルバートに託した計画表にも示された通りであるが、デニス・シャナハンDennis M. Shanahanが指摘しているように『ユリシーズ』とキリスト教神話との平行関係も出版以来、論じられてきた (275) ¹。

彼はイエスの十字架の道行きと留とを挿話毎に対応させ、第12挿話はイエスが三度目に倒れた箇所に相当するとしている。筆者はこの点については賛同しないが、彼が『ユリシーズ』に宗教的儀式としてのカトリックのミサを見出している点に着眼し、本発表では、第12挿話に暗示されている十字架の道行きとミサの象徴に関連し、同挿話の巨大化された語りのパロディに隠されている原型的なキリスト教の神話相とロバート・エメットの処刑との関連を考察する。

「キャッチ・ワード一つで十分ぼくは始められます」 (宮田614) ²と、ジョイスはバジェンに書いたが、『ユリシーズ』のテキストに散種されたキャッチ・ワードを拾い、ジョイスによって、史実が「創造的」に翻案された「想像」の「旅」³をたどってみたい。

1. Dennis M. Shanahan. "The Way of the Cross in *Ulysses*," *JJQ* 20, vol.3, 1983.

2. Michaelmas 1920. To Frank Budgen. *Letters* I, ed. Stuart Gilbert. New York, Viking P. 1957, 1966. p. 147. 和文は宮田恭子氏の翻訳 (614頁)。

3. Cecilia Rossi は文学翻訳者の翻訳過程の方法に着目し、原書の創造的過程と翻訳とのアナロジーを構築し、Paul Valéryがヴァーゼルの詩を翻訳する際、異文化に行くことを翻訳の「旅」として、自らの翻訳過程を「作家の残した轍を歩くこと」と定義していると記している。彼女も、翻訳過程は、作者の創造的方法を「実質的に」再生する過程であり、再創造される過程であると論じている(381)。

3. シンポジウム要旨

シンポジウム I 音楽、ラジオ、オーディエンス——ジョイスのサウンドスケープ

横内一雄 (兼司会)、平繁佳織、永嶋友

ジョイスはしばしば視覚型というよりもむしろ聴覚型の作家であったと言われる。小説作品には多彩な音が満ち、また小説に描かれ世紀転換期のダブリンもさまざまな音／音楽に満ちている。加えて言えば、ジョイスの生きた世紀転換期から20世紀前半にかけては、各種音声メディアの開発・普及により、人類の聴覚文化が大きな変容を被った時代でもあった。ジョイスは彼の生きた時代の音をどのように表象したのだろうか。また、その音はどのような環境で生起し、どのように享受されただろうか。本シンポジウムでは、R. Murray Schafferのsoundscapeという概念にヒントを得てジョイスが表現した音の風景に論及しつつ、当時の音楽文化やメディア文化といった音にまつわる問題を俎上に挙げて、議論を喚起してみたい。

『ユリシーズ』音響論序説——音の空間構築術

横内一雄

はじめに横内がR. Murray Schafferのsoundscapeという概念について解説し、さらに映画音響論の考え方を導入しつつ、映画やオペラといった（特にジョイスの）小説の周辺ジャンルにおける音響構造の問題に焦点を当てる。ジョイスの小説、とりわけ『ユリシーズ』は、語り手の恣意的介入を嫌ってシーニック（場面提示的）な語りを採用している。特に第7挿話と第11挿話は、焦点をブルームの意識よりもどちらかという場面面に固定して、ブルームをもそこに入出入りする人物たちの一人として扱っているため、他の挿話にもまして映画やオペラに共通する音響構造を孕んでいると言える。新聞社ないし酒場兼食堂の空間構造がいかにその中で生起する音を立体的に演出しているかを見てみたい。さらに、第15挿話では、やはりブルームひとりの意識というよりも売春宿の場面自体に焦点が置かれ、さらには現実と幻想が入り乱れる展開の中、ピアノラ、蓄音機、ラジオといった新しい音声再生装置が幻想の増幅に一役買っている。こうした事実の持つ意味についても考察を加えてみたい。

遠くから響く声——『ダブリナーズ』と『ユリシーズ』における歌の使われ方

平繁佳織

ジョイスの作品で言及される歌は、19世紀終わりから20世紀初めにかけてのダブリンにおいて非常にポピュラーだったものばかりだ。登場人物がメロディーを口ずさめば、自ずと周りにいる者の耳に馴染んでいたことだろう。アビー劇場の作家たちは、しばしば民謡や讃美歌を用いて劇場内に一体感を生み出そうとしたが、それは観客がその歌を知っているという前提に基づいた選択であった。人びとに広く共有されたレパートリーは、しかし部外者にはむしろ疎外感を感じさせる効果もある。また、ジョイスはそれぞれの歌の成り立ちや歴史的背景に言外の事柄を語らせるという手法を採ることがあるが、そういった情報にすべての人が精通しているはずもない。小説内の空間に歌が響くとき、聴く人には聴こえる一方で、時には誰にも届かずに消えゆく物語もあると言える。本発表では、『ダブリナーズ』と『ユリシーズ』を中心に、同時代のアビー劇場作品における歌の使われ方を参照しつつ、作品内で歌が歌われる時の「場」と登場人物への「心理的効果」に着目し、20世紀初めのアイルランドにおける音楽の享受の仕方、その特徴を探ってみたい。

ジョイスとラジオ——ラジオ・リスナーの感覚・心理を中心に

永嶋友

はじめに、ジョイスと同時代のワイヤレス通信研究、ラジオ放送、ラジオ劇、ラジオ・リスナー調査、ラジオ・リスナー心理研究などを概観し、その後、それらの観点からジョイス（や同時代の他の作家）のテキストを考察する。ラジオは『フィネガンズ・ウェイク』における重要な象徴の1つであり、また、同作品の第2巻第3章では、HCEのパブのラジオからノルウェイ人船長と仕立屋の話やバットとタフのスケッチ・コメディなどが流れてきており、ラジオが中心的な役割を果たしている。ラジオの放送内容だけでなく、ラジオ・リスナーの感覚・心理等に着目し、ジョイスのラジオ・リスナーに関する理解、またそれが同時代のリスナー研究とどのような関係にあるのか、それらがどのように彼のテキストに落とし込まれ

ているのか、などを示していきたい。また、これらの議論を踏まえた上で、『ユリシーズ』におけるワイヤレス通信に関する描写に立ち戻り、少々考察を加えてみたい。

シンポジウムⅡ 『フィネガンズ・ウェイク』ワークショップ：「アナ・リヴィアの独白」を読む (619.21-628)

山田久美子（兼司会）、宮原駿、下川理英、奥田良二

『フィネガンズ・ウェイク』最後の9頁余は、朝の居酒屋で目覚める主人公HCEの妻、アナ・リヴィアの独白と呼ばれる部分で、冒頭「川流れ」へと続く円環を構成する美しい文である。夫を擁護するアナの手紙が終わり、誰にともなく人生を回想する場面で、ウィックロウで湧いた泉がリフィ川となり、ダブリン湾に流れ込んで姿を消すまでが語られる。「柔らかい朝、街！ルズプ！わたしは葉を茂らせて喋っている。ルズプ！」と始まり、「そっと、私を覚えていて！あなたが千歳になるまで。リップ。への鍵。与えられた！道孤独な最後の愛された長いあの」と終わる。近年、*James Joyce Digital Archives*等オンライン資料の充実により、生成過程や研究書を含め手の届くようになった『ウェイク』であるが、このワークショップを機により身近になれば幸いである。（文責 山田）

『フィネガンズ・ウェイク』における「汚い流れ」に見る夢見人の人生観

——主人公の罪と、尿、川、言葉の連関——

宮原駿

ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』において「汚い流れ」は尿、川、言葉の流れなど様々なイメージの包括的表象である。汚い流れには、『ウェイク』という物語を夢見る主体、「夢見人」の人生における過ちという大きな主題が潜んでいる。本発表の主眼は、汚い流れの分析を通して、夢見人が目覚めた意識では到底向き合うことができない人生の過ちを受け入れようとする態度を探求することにある。彼の見る夢の中では、尿や川、言葉という汚い流れは、一方で、支配的な秩序を脅かす力を持ち、特に主人公 HCE の罪とのつながりをもつ。例えば、謎の女 Fanny Urinia (171.28) の挿話では、彼女の場違いな排尿は酒場の文化秩序を攪乱する。また、排尿する乙女たちの挿話において彼女たちの排尿行為が HCE を猥褻行為へと掻き立てる。しかし、他方では、罪の主題と結びついた汚い流れは再生へと導く力を秘めており、それは特に第四部の ALP の独白において HCE の罪の受容とやり直しの希望につながっていく。第一部第八章に登場する洗濯女たち Mrs Quickenough と Miss Doddpebble は ALP が体現する Liffey 川の汚い水にまみれていくうちに楡と石という新たな存在として再生することになる。そして、川の流れが言葉の流れと一体化する ALP の独白において、彼女は夫 HCE の謎めいた罪を許し、その人生を受け入れることで未来への希望を携えてダブリン湾に流れ込む。『ウェイク』という夢の物語をメタ的に解釈すれば、こうした汚い流れにおいて緩やかに結びつくいくつかのイメージと HCE の罪との結びつきが、夢見人自身の罪意識をその源泉としていると仮定できる。「汚い流れ＝人生の過ち」という主題は、彼の夢の意識において、人生における過ちに苦しみながらも、目を背けず、可能性を探り、最終的に人生をそのネガティブな面も含めてまるごと認めようとする受容的な態度へと通じているのではないだろうか。

sonhusbandとdaughterwife: ALPの独白に見る東洋思想

下川理英

本発表では、『フィネガンズ・ウェイク』最終章のALPの独白に見られる東洋思想（輪廻転生）を考察する。ALPはHCEの妻であり、シエムとショーン、イッシーの母親であると同時にリフィ川の化身であり、川の水がウィックロウの山中からダブリン湾に注いでいく様が描かれているのは周知のことである。第3部最終章のALPの独白の最後に見られるsonhusbandとdaughterwife（627）に着目し、息子でありながら夫、娘でありながら妻の言葉の意図を探っていく。‘my cold mad feary father（冷たくて狂っていて恐ろしいお父さん）’の元に帰っていくALP（娘のイッシーが同化？）、すなわち海に流れ込む川の流れは、終わりを表す「死」なのではなく、「新生」言い換えると「輪廻転生」を暗示している可能性を示したい。意味深なsonhusbandとdaughterwifeの表現は、魂が転生を繰り返し、正体を失い様々な「我」が入り混じった状態を指すのではないだろうか。

また、「鍵」もこの独白では重要なキーワードである。“How you said how you’d given me the keys of me heart”（626）と描かれ、そしてその「鍵」は最後のシーンで“The keys to. Given!”（628）となりALPは海に同化し、転生のための死を迎える。彼女がHCEから受け取った鍵は何を意味するのか、当時世間を賑わせ、ジョイス自身も大いに関心を持ったエジプトのピラミッドから出土した永遠の命を目指す『死者の書』との関連を探る。

「死」は終わりではなく、永遠への始まりだと考える東洋の思想は西洋の死に対する考え方と大きく異なる。西洋から見た東洋は「エキゾチックな他者」であり、死を恐れない姿勢は未開的で異様であるからこそ魅力的であった。一方、西洋の周縁（西端）に位置するアイルランドは地理的政治的に「西洋の中の東洋」のような存在であった。トリエステ、パリ、チューリッヒと欧州各地を放浪したジョイスが、作品の中で母国をどのように東洋と結び付けて描いたかについて本発表で論じてみたい。

アナ・リヴィアとジョイスの独白

奥田良二

『フィネガンズ・ウェイク』の最後に置かれているのが、「アナ・リヴィアの独白」であり、この終結部が、大作の締めくくりにあふさわしい極めて重要な意味を持っていることは、容易に推測できる。劇に例えると、この部分は「納め口上」であり、俳優の一人が舞台上に登場し、劇に描かれた世界についての説明や弁明、役者や作者の意見や意図を述べる場所である。時には当時の社会問題や将来についての意見や批判を加えることもある。『フィネガンズ・ウェイク』も同じだ。小説の登場人物の一人ALPが、一人で「納め口上」を行い、作品を振り返っている。

だが、ALPの独白を読むと、誰に対して独白しているのかがはっきりしない箇所がいくつかある。また、独白の中で誰のことを言及しているのか、さらには語っているのはALPなのかどうかも不明なところがある。特に、何度も使われるyouや、heやhim、weやusなどが、誰のこと言っているのか、そして、IはALPだけなのか、という疑問が残る。ALPは、HCEだけでなく、フィン・マックールや、イギリス

(人)、アイルランド(人)、読者、そして作者(ジョイス)らに対して独白し、言及しているのではないだろうか。また、独白しているのは、ALPだけでなく、ジョイス自身でもあるのではないか。「納め口上」の性質から、作者の意見や意図が語られることはあるが、ではジョイスはこの独白のどこで顔を出しているのだろうか。そして何を伝えようとしているのか。これらの点について明らかにしていく。

語り手や語られる相手が変わると、読む視点も変わる。視点を変えて読んでみると、解釈の可能性が膨らみ、このエピローグの内容のより詳細な解明に近づくことができる。独白に続く作品の冒頭部分のプロローグとの繋がりを考慮しながら、いくつかの視点からこの独白を読み解いていきたい。

4. 第32回研究大会日程・大会会場

会場：大妻女子大学千代田キャンパス
 大会会場：本館F棟342 (定員117人)
 控室：本館E棟362ゼミ室 (20人規模)

**徒歩
マップ**

千代田キャンパス
 家政学部 文学部 社会情報部
 比較文化学部 短期大学部

JR・地下鉄「市ヶ谷駅」
 大学校舎
徒歩
約10分

※大会会場と控室がそれぞれF棟とE棟になっていますが、実際は近くに配置されています。いずれも3階です。

→<http://www.otsuma.ac.jp/about/facilities/chiyodacampus>

右地図の拡大図は協会ホームページからダウンロードいただけます。「研究大会」のページをご覧ください。

→<https://www.joyce-society-japan.com/研究大会/>



大妻女子大学 千代田キャンパス

〒102-8357 東京都千代田区三番町 12 番地

TEL : 03-5275-6000 (代)

5. 新常任委員候補と会長の退任および新会長

常任委員の改選を踏まえ、昨年末に投票、今年1月11日に開票が行われました。新しい常任委員候補は以下の9名の方々です。候補の決定にあたっては、結城英雄先生が会長から退かれること、また前事務局長の戸田勉先生が本務校での退職を機に委員を辞退されたことを踏まえ、新たに二名の方（下線）が繰り上げとなりました。

金井嘉彦、河原直也、吉川信、下楠昌哉、須川いずみ、横内一雄、道木一弘、田村章、田多良俊樹

結城先生には、清水先生の後を継いで7年間会長という重責を担って頂きました。この場を借りて長年のご苦勞に心からの感謝をお伝えすると同時に、ご退任のあとも協会へのご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。新会長には吉川信先生が就任される予定です。尚、新常任委員は6月に予定されている大会総会での承認を待って、正式に決定する予定です。

6. 会員専用メーリングリストについて

すでにホームページでお知らせしてありますが、経費節減と事務手続き簡略化のため、現在会員専用のメーリングリストを作成中です。すでにメールアドレスを事務局にお知らせいただいている会員の皆様には事務局員からメーリングリストに登録を行うための招待状メールが送信されています。メール内にある「この招待を承認」というボタンを押していただくと、自動的にメーリングリストに登録され、以降 joyceanjapan@googlegroups.com から配信されるメールを受信できるようになります。将来的にはこのニューズレターも紙媒体からメーリングリストでのお知らせへと移行したいと考えております。ニューズレターの招待メールが届いていない方は、お手数ですが事務局までお名前とメールアドレスをご連絡いただきますようお願い申し上げます。

7. 会費のお振込みについて

会費は、協会の口座へのお振込みをお願いいたします。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担いただいております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、下記の振込先となりますのでご注意ください。

一般会員・・・5000円 学生会員・・・3500円

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
口座番号（記号）10430
番号1854541

*振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。

2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900 店番号：048
預金種目：普通
店名：○四八店（ゼロヨンハチ店）
口座番号：0185454